

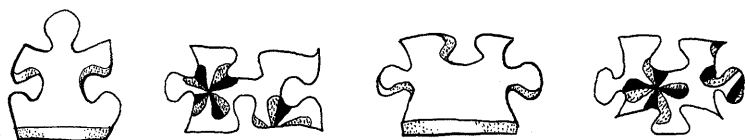
巻頭言

多面的でダイナミックな 子ども理解の素材を求めて

— 映画と物語の活用 —

大戸 美也子

このところ「子育て支援」という言葉がすっかりわが国に定着し、「子育て」と「支援」とは切り離せない関係になってきた。幼稚園でも、保育所でも、各自治体もNPOもそれぞれ思い思いの「子育て支援」事業を展開し、今や「支援」の自由競争に突入した感がある。こうした時代だからこそ実態の把握、問題の把握が重要となり、各種の調査が求められ、実際大小さまざまな調査がすすめられている。そ



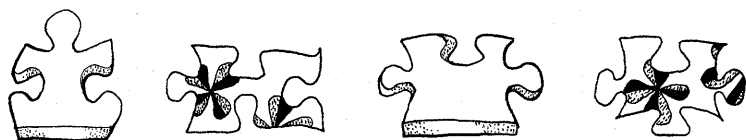
こで明らかになりつつある調査結果の一つとして、「支援事業によって育児負担感軽減の目的は果たされているが、親としての養育力の向上の支援になっていない」（金谷・他 二〇〇四）という指摘は注目に値する。昨今隆盛をみている子育て支援事業は、もともと行政が少子化に歯止めをかけようとする政策目標を実現するための手段としてはじまり、子育ての当事者は親であるという前提のもとに、親の育児負担の軽減をねらっていたのだから、この結果は支援プロジェクトの目標は一応果たしていることを示唆している。しかし、肝心の「親の養育力」の獲得に必ずしも結びつかないとしたら、今度は子どもの生活や成長に直接かわる人々の知恵や知見を出し合って養育力を高めることに貢献する事柄をいろいろ提案していくことが重要であることは明らかである。「子育て支援の実態と課題」については、日本保育学会課題研究委員会が第五十七回大会においてシンポジウムを企画し、最新の研究成果が報告される予定なので、詳しい内容はシンポジウムの展開に譲るとして、ここでは親の養育力の一部である子ども理解の在り方について啓発された二つの素材を紹介してみたい。

ひとつは、アイスランドの映画『ムービー・デイズ』である。ムービー・デイズとは、映画が娯楽の王様であった時代という意味で、映画が一家の楽しみであり、



映画の主人公に危機が迫ると「あぶない！」とスクリーンに向かって声をあげ、危機を乗り越えたと拍手喝采した時代、一九五〇年代はじめに、アイスランドの首都レイキヤビックの米軍キャンプの撤去後払い下げられたカマボコ兵舎で暮らす庶民の暮らし、特に子どもの生活と成長を淡々と描いた地味な映画である。しかし、ここに登場する子どもたちのすることなすことがかつて自分もやったり、目撃したことばかりで、時代と子どもの日常の類似性と共通性に大いに驚かされた。雪解け水で泞みの道やその水たまりさえ遊び道具に変える子どもたち、背広を着た大人たちが行き交う通りを遊び場に変える子どもたち、大人をひやかし笑う子どもたち、彼ら、見慣れぬ大人を追跡しいろいろな秘密を探る子どもたち……子どもたちは彼ら独自の生活を力一杯展開しつつも、大人たちと家庭や路上や映画館で出会う機会の何と多かったことか。そして、大人もまた子どもたちが身近にすることで彼らの豊饒な世界をかいま見たり、子どもとのつきあいの面白くもあり一筋縄でいかないもう一面の理解をも深めていたことを教えてくれるのである。

この知らず知らずの内に身につけてきた多面的でダイナミックな子ども理解は、あつちにくらがりこつちにくらがりしながらやがて自らの足で前進する子どもとつきあっていく上でどれほど有効であるかを、私たちはしっかりと認識する必要がある。子どもたちが身近な存在ではなくなり、大人たちの目に写る子どもは物理的



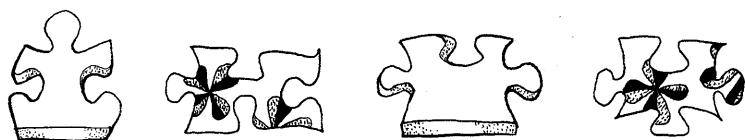
に少ないばかりか、心象的にも貧弱なものになってきている。そうすると、多面体の子どもの一面だけをみて別の一面が出てくると急に不安になったり、あるいは子どものある一面だけを伸ばそうと親のしいた路線に子どもをのせ一直線にすすむよう後押しすることに専念することになる。これでは、子どもはまるでボウリングのボールのようなもので、得点獲得のためにひたすら邁進するだけの存在、後押しされなければ動かないものに成り下がるしかない。子ども理解を広げ、貧弱なイメージを広げる素材として『ムービー・デイズ』は秀作と思うのであるが、残念なことはマイナーなアイスランド映画であるため上映機会が極めて限られていたことである。

もう一つ、子どもの多面性を理解し、やんちゃで聞き分けのない子どもが成長の階段を上り続ける過程で大切な大人の役割について考えさせられる素材として、嘘をついて鼻がのびる操り人形の物語『ピノッキオの冒険』を紹介したい。昨年二月、イタリア文化使節としてリミティ先生（OMEPP前イタリア国内委員長）が来日され、彼女の『子どもの人権』についての講演会に出席し、思いがけずピノッキオに再会することになった。多くの人が子ども時代にこの本に出会い、粗筋だけは覚えておられることだろう。今回、改めて読み直してみても、これは操り人形がよい子なって人間に生まれ変わる「成長の物語」であることがわかった。ピノッキオ



は、元気に飛び回りじっとしていることは苦手、自分の要求が聞き入れられないと大泣きする、勉強は嫌いだが安易で楽しい話にはすぐ乗る、誘惑には弱く約束は忘れる、ひどい目に会った際に反省するが同じ過ちを繰り返す、甘いものは大好きだが薬は飲まない……やんちゃでいたずら好きの子どもの特徴を一身に集めた明るく魅力的なキャラクターである。この物語は、一八八一年（明治十四）作者C・コッローディ（一八二六～一八九〇）が五十五歳のとき、当代一流の作家・評論家が寄稿していた『ファンファアラ』紙の付録『子ども新聞』に連載した読み物「あるあやつり人形のおはなし」として始まった。毎回子どもたちの創造力をかきたてる仕掛けと工夫があり、つぎの話に引き込んでいくような話しの展開に、当時から子どもたちの人気を集めていた。だからピノッキオが森の中でおいはぎに大きな櫟の木につりさげられ「死神」が近づく場面（第十五章）で中断したとき、小さな読者の抗議が殺到し、死の直前のピノッキオが妖精に助けられるところから再スタートしたエピソードをもつという（藤澤 二〇〇三）。ピノッキオは、コッローディの創作であるが、ピノッキオを自分と一体化した子どもたちの後押しがなければ、『ピノッキオの冒険』は生まれなかったのである。

コッローディは、ピノッキオをしばしば家から外へ連れ出し、人間だけではなく、コオロギやカタツムリなどの昆虫から植物やキツネ、ネコ、イヌなどの動物と



も自在に交流させ数々の冒険の機会を与え、挫折と回復を繰り返しながら成長の階段を上らせようとしている。そして、挫折のたびに彼を支える代表として妖精とジュペット爺さんを登場させる。どんな失敗をも許し助ける寛容な妖精と深い愛情をひたすら与えつづけるジュペット爺さん。これらは養育力の姿を変えたものとみることでもできよう。ピノッキオは、やがてこの二つの大きな存在に気づき、彼らの困難を助けるために力を貸したとき、操り人形から人間へ、すなわち自らを操ることのできる自律した人間へと変身するのである。

ピノッキオをはじめとする身近かな物語の中に潜在する人間教育的な価値を発見して養育力の栄養にしたいものである。

(武蔵野大学)

参考文献

- 金谷京子・他「子育て支援の実態と課題」日本保育学会第五十七回大会発表論文集二〇〇四
 藤沢房俊『ピノッキオとは誰でしょうか』太陽出版 二〇〇三
 ボール・アザール『本・子ども・大人』矢崎源九郎・横山政雄訳 紀伊国屋書店 一九五七